



往時の姿を残す旧講堂

**白** 金台駅のほど近くにある港区立郷土歴史館。この建物は、昭和13年（1938年）に、国民の保健衛生について調査研究する国立機関「公衆衛生院」として建設された。研究機関としては平成14年（2002年）に国立保健医療科学院と統廃合され、その後土地と建物を平成21年に港区が取得。耐震補強やバリアフリー化等の改修工事を実施したうえで、平成30年に港区立郷土歴史館として新しく生まれ変わった。

垂直にのびた中央棟と、左右に広がる翼状の棟から構成された、左右対称の威厳ある建物である。

地上6階、地下1階の鉄骨・鉄筋コンクリート造となっている。

この建物を設計したのは、東京大学の安田講堂や総合図書館などを手がけたことで知られる内田祥三<sup>よしかず</sup>。



東京のレトロ建築を歩く

第4回

## 港区立郷土歴史館

名称	港区立郷土歴史館
DATA 所在地	東京都港区白金台4-6-2
完成	昭和13年
設計者	内田 祥三



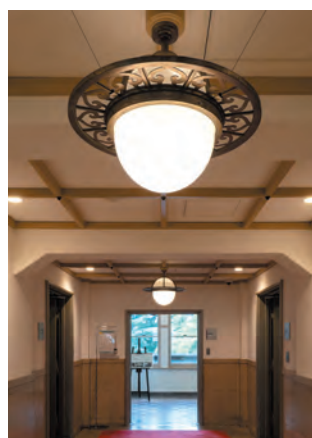




吹き抜けが美しい中央エントランスホール



床の寄木細工が印象的な旧院長室



レトロな照明器具

外観の特徴として、正面エントランスのリズミカルな石造りの5連アーチ、「スクラッチタイル」という引つ掻いたような細かい溝模様のタイルで覆われた外壁が挙げられる。これらは「内田ゴシック」

と呼ばれる特徴的なデザインである。建物の内部にも、往時の様子が色濃く残されている。

正面に位置する中央エントランスホールは、円形の吹き抜けの天井に華やかなレリーフがあしらわれ、床や壁には高級な石材がふんだんに使われている。

左右対称に設置された階段や床の幾何学模様など、ほぼ当時の姿をとどめる荘厳な造りが印象的だ。

館内各所の重厚でレトロな雰囲気、電灯器具も、創建当時のものが多数残されている。

3階の「旧院長室」には、当時は高級建築材であったベニヤ材が張られている。床は寄木細工という手の込んだしつらえになっており、当時の職人技術の高さを見ることができる。

4階の「旧講堂」は、公衆衛生院時代に式典や研究発表の場として利用されていた場所だ。340席ある座席のクッションと天井板以外は、建設当初の部材がそのまま残されている。階段状の構造になっいて、上からも下からもよく見渡せるよう設計されている。

講壇の左右には、大正から昭和にかけて活躍した彫刻家、新海竹蔵によるレリーフが配されている。

令和元年9月に、「旧公衆衛生院」として港区指定文化財（有形文化財「建造物」）に指定された。